

大学運動部活動参加と学生の社会性および生活充実度の関係

大分大学大学院 内 倉 康 二

大分大学 谷 口 勇 一

Relationship between Sociality and substantiality of life through the participation in athletic club activity at the university.

Koji UCHIKURA and Yuichi TANIGUCHI

Oita University, Oita JAPAN

キーワード：大学運動部活動，社会性，大学生

Key Words: University Athletic Club Activity, Sociality, A University Student

1. 緒 言

大学生（以下、学生と記す）をはじめとした若者の生活能力低下が社会的に問題視され始めて久しい。就職活動を意図的に行わない学生，卒業後も定職に就かず無気力の状態で日々の生活を送る若者等を指した「ニート」（NEET）現象が社会問題化していることは周知の事実である。高等教育機関である大学には，学生に対し，知識・倫理・技術等を深く学ばせ，その教育成果を職業人として広く社会に還元することが期待されている。しかしながら，上記した「ニート」をはじめとした生活能力の低下傾向をみる学生たちに対して，大学当局は様々な取り組み（支援策）を試行しながらも，決定的な打開策（教育内容）を提示するには至っていない。

学生の問題を取り扱った研究はこれまでも数多く存在する。なかでも下山⁶⁾は，大学生の無気力の意味について明らかにした研究の中で，学生の無気力の形成に関する因果モデルを推定した上で，モデルの妥当性の検証を行い，大学生生活に関わる様々な要因との相関を見ながら，一つのモデル構築に至り，意欲低下を多元的な構造であるとしている。その構造からも，学業への意欲低下と大学生生活自体に対する意欲低下は同一次元上にはないものであると把握し，「大学生生活に対

する意欲低下は，発達的な問題というよりも，快迫及，課題回避の性格に由来するルーズな生活態度によって生じた行動上の問題」であるとした上で，「授業や学業といった大学のもつ教育的機能よりも大学という環境（キャンパス）が重要な心理的意味を備えている」とし，大学内における学生の自発的・主体的な行動契機を促す仕組みと仕掛けづくりの重要性について論じている。また，甲斐と山崎²⁾は，不安等を抱えやすい学生の精神的健康状態を問題視し，現代社会の中で精神的健康度を高く維持する必要があるとした上で，そのための手立てとしての運動に着目し，運動に関するライフスタイルと精神的健康状態の関連性を検討している。当該研究では，運動生活レベルが好ましい状態（定期的な運動実践機会有り）にある学生ほど，精神的健康状態が良好であるとの興味深い見解が示されている。

上述した先行研究の知見を勘案すれば，今日の学生を取り巻く各種問題解決の方向性は，学生自身が大学生活において，自発的・主体的に関与できる各種行動の機会が多様に準備されること，また，定期的かつ適切な身体活動（運動）の機会が整っていること，に見出せはしないか。換言すれば，大学生活における“課外活動”である運動部活動への積極的な関与は，学生

たちの精神的健康状態を良好なものへと導き、なおかつ、生活意欲の向上、学生生活の充実に寄与する可能性を有している。この点に関しては、渡部と平井⁹⁾が大学運動部活動参加学生を対象に実施した調査研究結果と符合する。すなわち、「(大学内運動部活動は)部員の大学に対する所属意識を高め、心理的安定に貢献している」のである。また、上野と中込⁵⁾はスポーツによる人格形成について、ライフスキルの獲得という視点から検討しており、運動部活動参加者は一般生徒よりもライフスキルを獲得している程度が高いことを明らかにしている。ここでいうライフスキルの項目内容を見ても、本研究における「社会性」に類似している。しかしながら、ここで採用されているライフスキル測定尺度は、「対人スキル」および「個人スキル」のみで構成されている。「社会性」とは、堀尾ら¹⁾によれば、「仲間関係やさまざまな人間関係を通じた思いやりや健全な自己意識、有能感、学習意欲等」で構成され、社会生活への適応性を意味する。堀尾ら¹⁾の言う「社会性」の定義に賛同すると、上野と中込⁵⁾の研究におけるライフスキル(「対人スキル」「個人スキル」)は類似しているものの、比較的狭い範囲で捉えられており、さらに多元的に捉える必要があるものと思われる。また、これまでの研究において上述した「社会性」定義のもとで行われたものはさほど多くみられない。

そこで本研究では、事例的にO大学における運動部活動を取り上げ、運動部活動参加が学生の社会性形成および生活充実度の向上に寄与するという仮定のもとに、さまざまな課外活動パターン(運動部、運動サークル、文化部、無所属)といかなる関連性を有しているのかについて検討する。主な作業は、上述した堀尾ら¹⁾の「社会性」の定義に賛同し、なおかつ高校生ならびに高等専門学校生を対象として「社会性」の構造を見出した山本ら^{10),11)}の研究知見を踏まえ、大学生版の「社会性」構造を探索的に把握し、各種検討作業を施すものとする。山本ら^{10),11)}の研究で用いている社会性項目は、「目標遂行」「意思表示」「対人関係」の3つの因子により構成されている。しかしながら、これらで社会性を説明するには取るに足りず、さらに広く「社会性」を捉える必要があると思われる。

なお、本研究においては、以下の点に考慮を施す。すなわち、事例となるO大学における運動部活動の多くには、専門的な指導者が配置されておらず、学生による自主的・自治的な運営が基本型となっている。よって、指導者の有無、競技成績の高低といった各運

動部活動の基本的属性要因を元にした検討作業は行わず、「体育会運動部活動」(以下、運動部所属者)、「運動系サークル」(以下、運動サークル所属者)、「文化部活動」(以下、文化部所属者)、「無所属」の属性比較を中心に考察していく。

2. 方法

1) 調査時期、調査方法、回収数(率)

2010年1月から2月にかけて、O大学の学生(1~3年生)を対象に、「大学生活に対する意識に関する調査」と銘打った質問紙調査を実施した。調査は、「運動部所属者」を抽出する目的から、体育会に所属する各運動部に対する協力を依頼し、該当部数を配布と回収する方式と、「運動部所属者」以外の対象者を抽出する目的から、大学内の食堂にて任意に対象者を選定し、個別に調査依頼の後、回答を求める方式の2パターンを用いた。なお、対象大学は国立大学法人であり、在籍学生数は4,203名で30の運動部を有している。運動部所属学生は521名で全学生の1割強が運動部に所属している状況にある(2010年3月現在)。

調査の全回収数は471部であったが、欠損回答が皆無の432部(男子:241部、女子:191部)を分析対象とした(有効回答率91.7%)。分析対象者の属性内訳は、1年生194名(44.9%)、2年生131名(30.3%)、3年生107名(24.8%)であり、「運動部所属者」123名(28.5%)「運動サークル所属者」93名(21.5%)、「文化部所属者」89名(20.6%)、「無所属」127名(29.4%)であった。なお、運動部所属者の活動種目は陸上競技、バスケットボール、野球、サッカー、テニス等の27種目である(表1)。

2) 調査内容

a. 基本的属性

性別、学年、学部、居住形態を訊ねる4項目を選択式により回答を求めた。

b. 運動部活動体験に伴う社会性測定項目

大学生の「社会性」構造を把握する目的から44項目を設定した。これらの項目は、山本ら^{10),11)}の先行研究の知見と筆者らが独自に実施した予備調査の結果を踏まえ作成した。筆者らが実施した予備調査は本研究対象大学の野球部員32名を対象とし、高校時代の部活動経験において身に付いたと思う能力に関して、自由記述式で10個の回答を求めた。そこで挙がってきた内容をKJ法にて精選した。その中で、「物事を前向きに考えることができる」「ミスをして過去のことであると思えば、すぐに切り替えることができる」「壁にぶ

表1 分析対象者の属性

		n	%
性別	男子	241	55.8
	女子	191	44.2
学年	1年	194	44.9
	2年	131	30.3
	3年	107	24.8
課外活動 運動部	運動部	123	28.5
	運動サークル	93	21.5
	文化部	89	20.6
	無所属	127	29.4
	陸上競技	20	16.8
	バスケットボール	18	15.1
	野球	15	12.2
	サッカー	10	8.1
	テニス	6	5.0
	ラグビー	5	4.2
	バレーボール	5	4.2
	剣道	5	4.2
	空手道	5	4.2
	バドミントン	4	3.4
	卓球	4	3.4
	ハンドボール	3	2.5
	体操	3	2.5
	水泳	3	2.5
	キックボクシング	3	2.5
	自転車	3	2.5
柔道	2	1.7	
弓道	2	1.7	
ゴルフ	2	1.7	
合気道	2	1.7	
テコンドー	1	0.8	
ワンダーフォーゲル	1	0.8	
ヨット	1	0.8	

つかったとき、一人で立ち向かうことができる」等の、山本ら^{10),11)}の研究では扱われていない内容がいくつか挙がってきたため、それらを本研究の社会性測定項目に反映した。なお、44項目に関しては、「大変身に付いていると思う(6)」から「まったく身に付いていないと思う(1)」の6件法により回答を求めた。

c. 大学生活全般に対する意識

生活満足度、充実度、授業満足度等を訊ねる3項目を4件法により回答を求めた。なお、質問項目は「あなたは現在の生活にどの程度満足していますか」(回答カテゴリーは「満足している(1)」から「不満である(4)」)、「あなたは現在の生活でどの程度充実していますか」(回答カテゴリーは「大変充実している(1)」か

ら「まったく充実していない(4)」)、「あなたは大学での授業全般に対してどの程度満足していますか」(回答カテゴリーは「満足している(1)」から「不満である(4)」)である。

d. 自己認識

現在の自分自身の成長感を訊ねる2項目を設定した。なお、質問項目は「あなたは大学生活の中で自分自身が成長していると感じることができていますか」(回答カテゴリーは「大いに感じることができている(1)」から「まったく感じられていない(4)」)、「あなたは高校期と現在の自分を比較するとどちらの方が立派だと思いますか」(回答カテゴリーは「高校の方が立派だと思う(1)」)、「高校期も現在も同じぐらいだと思う(2)」)、「現在の方が立派だと思う(3)」)である。

3) 統計処理

統計処理は、PASW Statistics18を用いて行った。手順としては、単純集計の後、因子分析(最尤法;プロマックス回転, 信頼性の尺度としてクロンバックα係数を用いた)、「課外活動パターン」を独立変数とし、「社会性得点」を従属変数とした一元配置分散分析、「生活充実度」を従属変数としたクロス集計分析およびχ²検定を実施した。

3. 結果と考察

1) 「社会性」の構成因子

学生の「社会性」の構造を明らかにする目的から、設定した44項目について因子分析(最尤法, プロマックス回転)を行ったところ、4因子を抽出した。因子負荷量0.40未満の項目や2つ以上の因子で0.40以上の因子負荷量を有する項目については削除しながら、最終的には44項目中21項目を削除し、解析対象は23項目とした(表2)。

第1因子では、「仲間のために何かしたいと思う」「仲間という意識が強く、友人を大切にする」「仲間と助け合い、協力することができる」等の6項目であり、周りと協力したり、周りのことに気を配ったりする能力であると捉え、「協調性」因子と解釈した。第2因子は、「将来に向けて計画的に考え、行動することができる」「将来の目標に向けて、今何をしなければならないかわかる」「将来のことについてしっかりと考えることができる」等の8項目であり、将来について考え、自らを高めようとする能力と捉え、「将来設計・自己向上」因子と解釈した。第3因子は、「自分の意見をハッキリと発言することができる」「大勢の前でも堂々と自分の意見を話したり、表現したり

表2 「社会性」の因子構造 —大学生を対象に—

因子解釈と構成項目	(主因子法; Promax回転)			
	因子負荷量			
	F1	F2	F3	F4
第1因子：協調性 ($\alpha=0.86$)				
4 仲間のために何かしたいと思う	0.89	-0.04	0.01	-0.10
5 仲間という意識が強く、友人を大切にす	0.86	-0.09	0.09	-0.04
15 仲間と助け合い、協力することができる	0.72	-0.11	0.16	0.03
33 仲間を信頼することができる	0.64	0.04	0.05	0.03
11 感謝の気持ちを持っている	0.61	0.16	-0.15	0.03
35 自分とは違う考えを持った人の意見を聞くことができる	0.43	0.14	-0.09	0.00
第2因子：将来設計・自己向上 ($\alpha=0.83$)				
32 将来に向けて計画的に考え、行動することができる	-0.02	0.76	0.08	-0.08
9 将来のことについてしっかりと考えることができる	-0.01	0.70	0.14	-0.11
19 将来の目標に向けて、今何をしなければならないかわかる	-0.08	0.65	0.02	-0.08
10 一つのことを諦めないで頑張ることができる	0.16	0.63	-0.14	0.08
22 自分に厳しくすることができる	-0.05	0.56	0.06	-0.01
12 辛い事でも妥協せず立ち向かっていくことができる	0.17	0.54	-0.15	0.19
3 何事にも集中して取り組むことができる	0.08	0.48	0.12	0.01
第3因子：自己主張 ($\alpha=0.84$)				
2 自分の意見をハッキリと発言することができる	0.03	-0.03	0.80	-0.04
8 大勢の前でも堂々と自分の意見を話したり、表現したりできる	-0.05	0.08	0.74	0.05
6 集団をまとめ、引っ張って行くことができる	0.09	-0.04	0.70	0.01
21 周りに指示を出すことができる	-0.05	0.08	0.66	0.02
25 自分の意見を持つことができる	0.07	0.08	0.47	0.11
第4因子：課題対応 ($\alpha=0.73$)				
13 物事を前向きに考えることができる	-0.03	-0.16	0.01	0.88
38 ミスをして過去のことであると思い、すぐに切り替えることができる	-0.07	-0.01	0.05	0.66
17 気持ちで物事を乗り切ることができる	0.18	0.05	-0.04	0.50
27 プレッシャーに強く、いつも落ち着いて行動することができる	-0.09	0.21	0.15	0.41
因子間の相関				
F1 協調性	1.000			
F2 将来設計・自己向上	0.556	1.000		
F3 自己主張	0.513	0.563	1.000	
F4 課題対応	0.462	0.517	0.524	1.000

できる” “集団をまとめ引っ張って行くことができる” 等の5項目であり、自分自身の考えや意思を他者に伝えようとする能力と捉え、「自己主張」因子と解釈した。第4因子は、“物事を前向きに考えることができる” “ミスをして過去のことであると思い、すぐに切り替えることができる” “気持ちで物事を乗り切ることができる” 等の4項目であり、課題に直面したとき、自分なりに考え、柔軟に対応・克服してこうとする能力と捉え、「課題対応」因子と解釈した。なお、各因子の内的整合性を示すクロンバックの α 係数は、いずれも0.70以上であり、十分満足しうる値であった。

高校生ならびに高等専門学校生を対象とした「社会

性」構造について検討した山本ら^{10),11)}の先行研究においては、「目標遂行」「意思表示」「対人関係」といった因子抽出がなされている。本研究における「社会性」尺度は、山本ら^{10),11)}の用いた項目内容とは異なっているものの、「目標遂行」は「将来設計・自己向上」, 「意思表示」は「自己主張」, 「対人関係」は「協調性」とそれぞれ内容的に共通性が確認できる。「課題対応」に関しては山本ら^{10),11)}の用いた社会性項目にはみられないものの、堀尾ら¹⁾のいう「社会性」の定義に鑑みれば社会性構造に含まれることに違和感はない。第4因子として抽出された「課題対応」因子は、調査対象者の精神的発達度との関連性の中から見出されることになったと推察する。すなわち、大学生においては、

表3 因子別平均点比較 — 課外活動パターン別 — (一元配置分散分析)

	各項目の平均値 (標準偏差)				F 値・df	多重比較 (Tukey・5%水準)	
	運動部所属者 (n=123)	運動系サークル 所属者 (n=93)	文化部所属者 (n=89)	無所属者 (n=126)		Mse	比較
協調性	4.98 (0.72)	4.87 (0.73)	4.68 (0.79)	4.62 (0.83)	F(3,427) = 5.54 ***	0.59	運>文, 無
将来設計・自己向上	4.15 (0.72)	3.87 (0.78)	3.95 (0.84)	3.84 (0.83)	F(3,427) = 3.73 **	0.63	運>サ, 無
自己主張	4.14 (0.95)	4.06 (0.87)	3.75 (0.99)	3.68 (1.00)	F(3,427) = 6.48 ***	0.91	運>文, 無
課題対応	4.01 (1.01)	3.89 (0.87)	3.74 (0.78)	3.87 (0.99)	F(3,427) = 1.43 n.s.	0.87	

p<.05 *p<.001

高校生ならびに高等専門学校生と比較したとき、各種課題と相対する力が向上している可能性が高いといえよう。そのことは、「課外活動」をはじめとした多様なライフイベント数に起因すると考えられ、高校から大学期における、いわば青年前期の「内面的変容」を象徴する結果と把握できよう。このことから、本研究における「社会性」の構成因子に関する内容的妥当性はあるとみてよいだろう。

2) 課外活動パターンと「社会性」の関連性

表1において抽出された各因子に対する回答を得点化し、「運動部所属者」「運動系サークル所属者」「文化部所属者」「無所属者」それぞれの平均値を算出し、一元配置分散分析および Tukey の検定により多重比較を行った (表3)。

すべての因子で「運動部所属者」が最も高得点 (数値) を示した。なかでも、「協調性」「将来設計・自己向上」「自己主張」因子に関しては、他のいずれかの課外活動パターンとの間で有意差を確認した。

ここではまず、「運動部所属者」と「文化部所属者」「無所属者」間でみられた因子別平均点の差異について検討してみたい。

中川と新井⁴⁾は、中学校運動部活動における生徒の「生きる力」の獲得状況について検討し、以下の見解を示した。すなわち、運動部所属者においては文化部ならびに無所属者と比較して、「生きる力」の獲得状況が良好であること、運動部所属者においては部活動に対して熱心に活動した程度 (「コミットメント」) が文化部所属者、無所属者と比較して高いことを報告した。

中川と新井⁴⁾の研究は、対象者が中学生であり、本研究への援用にあたっては注意を要する。しかしながら、運動部活動への参加者 (生徒) において、文化部ならびに無所属者よりも「生きる力」や「コミットメント」が良好であるとする傾向は、本研究結果の解釈に示唆をもたらす。すなわち、中学生と大学生という、

年齢の差異にかかわらず運動部活動への積極的関与は、「身体による学び」の機会をもたらす可能性を有しているのである。

運動部に所属する者の多くは、身体活動 (スポーツ) を通して、試行錯誤を伴いながら自身の運動欲求を充足させる作業やパフォーマンスの向上を意図した先を見通した計画性等とともに、仲間と協力することの重要性、自身の考えを表現する大切さ、といった他者との関係性に対する意識と態度の涵養がなされることとなる。そのことは、中川と新井⁴⁾の研究にみられる中学生期のみに行われる作業ではなく、それ以前の幼児期から小学校期、さらには高等学校期、大学期といった、各ステージに応じて、その都度、為される作業なのである。なぜならば、身体活動 (スポーツ) を行うステージの変化に伴い、自らの中で行われる試行錯誤の種類には進化が求められることになるし、他者との関係性についても、その都度、新たな関係構築のための作業が指向されることになるからである。

表3にみられた「運動部所属者」と「文化部所属者」「無所属者」間の差異は、上述してきた「身体による学び」機会の有無ならびにその多少に起因し、生じているものと理解できよう。

つぎに、同じ身体活動 (スポーツ) の課外活動パターンである「運動部所属者」と「運動系サークル」間の差異について検討する。

松尾³⁾は、大学スポーツ界において「乱立」状態にあるスポーツ系サークルを取り扱った論考のなかで、体育会運動部の構造を以下のように説明した。「体育会運動部では、閉鎖的なタテ型集団を形成し厳格な行動規範を課すことで日常の関係性や日常においてこのように『感じるべき』といった、いわば感情規則を遮断し、全人格的な付き合い、いわば『同じ釜の飯』の人間関係を可能に」していると述べている。すなわち、体育会運動部の特徴とは、集団生活における対人関係を最も尊ぶ規範に象徴的なのであり、表2で見出され

た「協調性」因子に通じるといえよう。一方でスポーツ系サークルについて松尾³⁾は「開放的なヨコ型集団を形成し日常関係の作法は維持したまま、スポーツ活動や文化的活動を媒介として日常の気詰まりな関係性や孤独感を一時、留保し、つながりの一端に存在する自分を確認するとともに、いつ行っても迎えられ『強制しない—させない』関係によって一時の居場所としての意味空間を形成している」と説明している。表3において、「運動部所属者」と「運動サークル所属者」間に有意差を確認した因子は、「将来設計・自己向上」因子のみであった。上記した松尾³⁾のスポーツ系サークルの構造解釈に鑑みたとき、「運動サークル所属者」の志向性は、「一時の居場所としての意味空間」におけるスポーツ活動に留まった、いわば即時的な楽しさ享受を求めているといえよう。よって、「運動サークル所属者」においては、計画性を持ったスポーツ活動—個別ならびに集団としてのトレーニングプランの設定等—やスポーツによる自己の向上意欲には至っていない状況にあると推察でき、そのことが「運動部所属者」との差異を顕著にみた（スポーツ集団をめぐる規範的）要因といえよう。

しかしながら、本研究の調査対象大学においても、各種スポーツ系サークルの数は増加傾向にある。学生のさらなる体育会運動部離れ傾向が進み、逆にスポーツ系サークルへの参加傾向が助長された場合、表2で確認された「社会性」構造は変化する可能性を秘めている。この点については今後の継続的観察が必要であろう。

3) 課外活動パターンと生活充実度の関連性

表3において、課外活動パターン別の「社会性」の状況を看取した。ここでは、課外活動パターンと生活充実度の関連性について検討し、運動部活動をはじめとした学生生活における課外活動の意味について検討

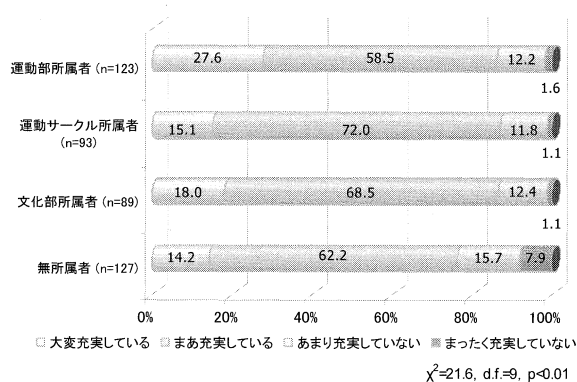


図1 課外活動パターンと生活充実度の関連性

を深めてみたい。

現在の生活充実度については、全体的傾向として「大変充実している」「まあ充実している」と回答した者の割合が高かった。なかでも、「運動部所属者」「運動サークル所属者」「文化部所属者」における生活充実度は、「大変充実している」と「まあ充実している」を合わせた数値が、それぞれ86.1%、87.1%、86.5%と大差無い状況となっている（図1）。このことから、何らかの課外活動への参加がなされている学生においては、日常的な生活充実度が「無所属者」と比べ高い傾向にあることが示唆できよう。「運動部所属者」「文化部所属者」においては、部全体で共通の目標を持ち、その達成に向けて仲間と協力しながら計画的に活動を行い、さまざまな課題を解決していくことで部活動に対する充実感を抱き、そのことが日常にも反映されていると考えられる。「運動サークル所属者」の充実度が高い傾向を示したのは、比較的自由な環境の中で、運動との適切な関わりがなされており、そこで充実感を抱き、そのことが日常の中での充実感へと転化していると考えられないだろうか。以下では、最も高い生活充実度を示す「大変充実している」に焦点化し、課外活動パターン間の比較検討を行ってみたい。

「大変充実している」と回答した割合は、「運動部所属者」が最も高く27.6%、次いで「文化部所属者」18.0%、「運動サークル所属者」15.1%、「無所属者」14.2%となった。この傾向は、前出した「日常的な運動レベルが好ましい状態にある学生ほど、精神的健康状態が良好である」との甲斐と山崎²⁾の先行研究の知見と符合するとともに、運動部活動と生活充実度をめぐる関連性を示す結果と言えよう。

図1の「(現在の生活が) 大変充実している」と回答した者のみを抽出し、自己成長感を訊ねた「大学生活の中で自分自身が成長していると感じることができ

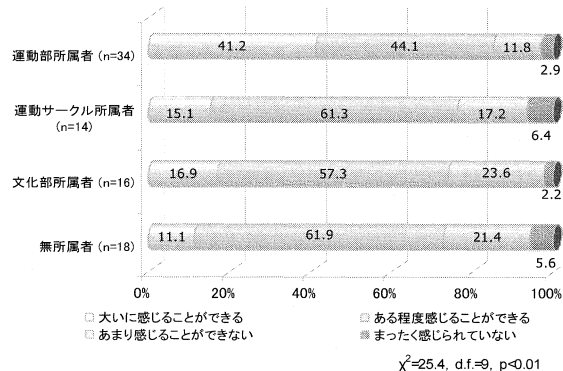


図2 生活充実度と自己成長感の関連性
※生活充実度の「大変充実している」と回答した者のみ

ますか」との関連性について分析したところ、「運動部所属者」の自己成長感は、他の課外活動パターンと比較して極めて良好な傾向にあった（「大いに感じることができる」41.2%、「ある程度感じることができる」44.1%）（図2）。このことは、関連質問項目である「高校期と現在の自分を比較するとどちらの方が立派だと思いますか」の回答傾向とほぼ符合する。すなわち、「運動部所属者」においては、「（高校期と比較して）現在の方が立派だと思う」の数値が41.2%となり、他の課外活動パターン（「運動サークル所属者」30.1%、「文化部所属者」32.6%、「無所属者」22.2%）よりも高かった。

信野⁷⁾は、自己成長感尺度の作成を意図した研究において、大学生を対象とした質問紙調査結果の多変量解析を元に以下の見解を示した。すなわち、「自己成長には大きく分けて『自己内の成長感』と『他者との関係にかかわる成長感』の二つの成長感がある」とし、なかでも『他者との関係にかかわる成長感』については、「他者への誠実な態度」「他者つながり感」「他者尊重」といった事柄の有無（多少）が強く関係すること、さらに順序性については、『他者との関係にかかわる成長感』の後に、「自己信頼感」や「自己安定感」といった、『自己内の成長感』が創出されることを示唆した。

信野⁷⁾の主張に倣えば、「運動部所属者」の多くは、他の課外活動パターンの学生と比較して、「他者への誠実な態度」「他者つながり感」「他者尊重」等の多様な「他者との関係にかかわる」経験が為されており、そのことが『自己内の成長感』、さらには日常生活における充実感の高まりを促していると推察できよう。松尾³⁾のいう「集団生活における対人関係を最も尊ぶ規範」を有する体育会系運動部に関与する学生たちは、「運動サークル所属者」や「文化部所属者」、さらには「無所属者」とは異なった、自己存在や自己の役割をめぐる正統性獲得に関する「困難さ」を伴う他者との関係性に接する中で、それを克服し、自己の成長感とともに、充実感を得ているのではなかろうか。

以上、大学生の「社会性」の因子構造を明らかにするとともに、課外活動パターンと「社会性」および生活充実度との関連性について分析した。その結果、「運動部所属者」はその他の課外活動パターンと比較して、「社会性」（協調性、将来設計・自己向上、自己主張）および生活充実度が高いことがわかった。よって、大学における課外活動、特に運動部活動環境の整

備・充実に向けた動きは、学生自身の学習機会を促す観点からしても肝要な事項の一つであるといえよう。

しかしながら、大学スポーツをめぐる動向は、今回調査対象にしたO大学とは異なる状況を迎えていることも事実である。友添⁸⁾は、「スポーツは大学経営にとって、いや、厳密に言えば、メディアへの露出度が高く、社会の注目を集める一流の学生トップアスリートは、大学の広告塔として大学の経営戦略の重要な媒体となる」と述べる。関東を中心とした、特に私立大学においては、もはや「課外活動としての大学運動部活動」ではなく、「大学経営の最重要媒体としてのスポーツ組織」化が進行している。そのような状況も相まって、トップアスリートを指向しない学生は、いわゆる体育会運動部に所属しづらい状況となり、前出松尾³⁾の研究にみられた「スポーツ系サークル」が隆盛期を迎えつつある。

しかしながら大学運動部活動は、本来、大学教育における「課外活動」である。上記した、いわゆる“強豪大学”のスポーツ事情を除けば、数多くの大学において、O大学とほぼ同様の運動部活動事情にあると予想できる。本研究で得られた知見を踏まえれば、各大学においては、学生の自発的・主体的な運動部活動への関与を尊重しながらも、多くの学生が、運動部活動をより身近に感じられるような運営形態と経営方法を積極的に検討すべき時期を迎えているといえよう。その際、体育教員においては、何らかの形で関与がなされるべきなのではなかろうか。O大学においては、体育会が定期的に主催する宿泊セミナー（リーダーシップセミナー）の中で体育教員が講義を行い、次期幹部学年を中心とした各運動部員が部活動の運営方法やトレーニング科学に関するノウハウ等を享受できる機会が存在する。当該セミナーへ参加した部員たちからは、「非常に参考になる話だった」「自分たちの部へ活かしたい」等の声とともに、「大学に入学してから初めて、専門的な知識にふれられた」「スポーツの専門家である教授（先生）たちとちょっと交流する機会があっほしい」といった、大学体育教員に対する期待感を看取するに至っている⁹⁾。上述した、いわば学生たちの体育教員に対する期待感は、実際の部活動場面においても形態を変えて確認することになる。

O大学には、体育教員が部長・監督として関わりを持つ部活動が少数ではあるが存在する。体育教員が日常的に関わりを持つ部活動における部員の充実感や満足感は、他の部活動に比べ高い状態にあることが、本研究で実施した質問紙における自由記述回答から看取

できる。すなわち、「ポイント練習の際、監督がいるだけで緊張した気持ちをもつことができ、良い練習ができる」「試合の後、監督から受ける助言は、自身を客観的に見たもので、その後の競技活動で活かすことができる」等からである。部活動は、学生による自発的・主体的な活動が基本となるものの、スポーツの専門家である体育教員の部活動への積極的関与は、部員の部活動に対する充足感の高まりを促すものと推察できる。体育教員の第一義的役割は、一般体育科目および専門科目において、学生の身体的・精神的健康度を高め、その後の自発的な運動実践を助長させることに見出せよう。しかしながら、上述した学生の今日的状況に鑑みたとき、大学「体育」に求められるスタンスは、運動部活動をはじめとした、各種課外カリキュラムの積極的活用による、学生の運動機会の創出を試行すべきなのではなかろうか。

最後に、今後の研究継続上の課題を述べておきたい。まず、運動部活動をはじめとしたスポーツ場面における「社会性」内容を明確に把握理解する目的から、より精度の高い尺度作成の必要性を感じている。そのためにも、多様かつ多数のサンプリングによる継続的な研究活動を実施したい。また、スポーツをめぐる「社会性」の意味・概念に関する考察作業を深めつつ、「社会性」と「生活充実度」の関連性についての検討を深めていきたい。すなわち、「運動部所属者において社会性形成が良好」である場合、そのことは、「大学」もしくは「運動部活動」という限定的な社会への適応性と捉えることも可能である。近年においても、高校球児の不祥事がメディアに取り上げられ続けること、その他多くのスポーツ界において不祥事が取り糺されているといった事実からも、それぞれスポーツによって形成される「社会性」は限定的な社会に留まるものである可能性を有していると認識せざるを得ない。大学卒業後、スポーツから離れた「社会」にも通ずる「社会性」とはいかなる内容で構成されているのか、等を含め議論を継続したい。

4. まとめ

本研究では、O大学における学生調査（質問紙）を元に、大学運動部活動が学生（運動部所属者）の社会性や生活充実度といかなる関連性を有しているのかについて検討することが目的であった。「社会性」構造を明らかにし、その尺度得点と課外活動パターンの関連性、さらに課外活動パターンと日常の生活充実度の関連性を検討した結果、得られた知見は以下のとおり

である。

- (1) 大学生の「社会性」因子としては、抽出順に「協調性」「将来設計・自己向上」「自己主張」「課題対応」の4因子であった。
- (2) 課外活動パターン別にみた「社会性」得点は、4因子ともに「運動部所属者」において最も高かった。なかでも、「協調性」「将来設定・自己向上」「自己主張」因子については、他のいずれかの課外活動パターンとの間で有意差を確認した。このことから、大学運動部活動は学生の「社会性」獲得（形成）に関連があることが示唆された。
- (3) 課外活動パターンと日常生活における生活充実度の関連性を検討したところ、「運動部所属者」の生活充実度が他の課外活動パターン（者）よりも高いことがわかった。よって、大学運動部活動は、日常的な生活充実度にも寄与する可能性が示唆された。

(附記)

本研究の実施にあたり、各種調査活動に協力いただいたO大学の学生諸氏に対し、深甚なる謝意を表す。

注

注1) 2008, 2009, 2010年度に実施された当該セミナーの報告書に記載されている、参加者からの声を抽出している。本報告書は、O大学体育会により編集されたものである。

参考文献

- 1) 堀尾緑, 濱口佳和, 宮下一博: 子どものパーソナリティと社会性の発達. 第1刷, 北大路書房, p1, 2000.
- 2) 甲斐葉津美, 山崎文夫: 大学生における運動に関するライフスタイルと精神的健康. JUOEH (産業医科大学雑誌) 31(1): 89-95, 2009.
- 3) 松尾哲矢: 乱立するスポーツ系サークルの今. 友添秀則, 中村敏雄, 清水論編『スポーツ評論14: 変貌する大学スポーツ』. 創文企画, 94-101, 2006.
- 4) 中川靖彦, 新井肇: 「生きる力」の育成と中学校における運動部活動の教育的価値の研究. 生徒指導研究18: 55-66, 2006.
- 5) 上野耕平, 中込四郎: 運動部活動への参加による生徒のライフスキル獲得に関する研究. 体育学研究 43: 33-42, 1998.

- 6) 下山晴彦：男子大学生の無気力の研究．教育心理学研究42(2)：145-155，1995.
- 7) 信野良太：自己成長感尺度作成の試み．北星学園大学大学院社会福祉学研究科北星学園大学大学院論集11：125-136，2008.
- 8) 友添秀則：大学スポーツという問題．友添秀則，中村敏雄，清水諭編『スポーツ評論14：変貌する大学スポーツ』．創文企画，6-15，2006.
- 9) 渡部近志，平井敏幸：大学運動部の成果と学生の所属意識及び情動との関連について．法政大学多摩論集18：199-222，2002.
- 10) 山本浩二，神野賢治，谷口勇一，内倉康二：高校生における社会性獲得に関する実証的研究—運動部活動参加状況による比較・検討を中心に．平成19年度別府溝部学園高等学校紀要：50-62，2007.
- 11) 山本浩二，神野賢治，荒木祥一：高等専門学校生における学校部活動への関わりと社会性獲得の関連性に関する実証的研究．津山工業高等専門学校紀要51：41-51，2009.

（平成22年6月8日受付）
（平成22年12月25日受理）